社説

全嶋の醜氛を一掃す可し

此程來臺灣の中部には又も匪徒の蜂起を見て守備兵の中にも若干の死傷者を生じたり割讓の新領地に是種の騷擾は[illegible]のことにして怪しむに足らず今後とても必無を期す可らずと雖も昨年の大剿討後既に二回の騷動を見れば彼の頑民のなか／＼御し易からざるを知る可し我輩は頑民の制御法に付き最初より強硬の手段を主張し苟も不穩の形迹あるものは嚴重に處分して一歩も假さず以て彼を威服せしむるは勿論、一般の施政に就ても内地同樣の法律を施行して自由自儘の擧動を許さず之に堪へざるものは颯々と境外に放逐して差支ある可らず割讓匆々單に恩を以て懷けんとするが如きは決して彼等を御するの道に非ずとの趣旨を幾回か陳述して注意を促したり當局者の方針果して如何なるや頑治の實際は委しく知らざれども彼の阿片の處分の如き其處置明白にして結果の恐る可きものあるにも拘はらず斷然嚴禁の決斷を敢てせず政府自から其毒物を製造販賣して彼等の嗜慾を恣にせしめながら若干の歳月を期して漸次に禁烟の目的を達するなど外より見ては如何にも迂遠き程の姑息手段に出でたる其筆法よりすれば其他の始末に就ても或は同樣の手段を免れざることもあらんかと我輩の竊に掛念する所なり抑も新領地の人民を御するの方法は自から一ならず在昔薩州にて琉球を手に入れたる時の如きは一切の武器を取揚げて其取締法は非常に嚴重にしながら政治を始め風俗習慣その他の事は全く自由にして毫も干渉せず只その貿易を兼防して商賣の利を收むるの目的なりしと云ふ彼の英國が海外の土地を切從へて之に處するの政略も凡そ此筆法なれ共臺灣の始末に至りては決して同一に視る可らず琉球の如きは人民も從順なる其上に本來孤立の島嶼にして當時に於ては他の交通も甚だ不便なりしが故に其人民に兵器さへなければ掛念するに足らざりしと雖も臺灣は全く反對にして頑民の頑迷御し易からざるに加ふるに土地は支那大陸に接近して兵器などの密輸送も甚だ容易なり現に今回の騷動にも或は共謀の疑もあるよしにて實際の取締頗る困難ならざるを得ず況んや本來の目的は頑民を相手に商賣の利を謀らんとするに非ず既に我版圖に歸したる上は一切の商賣企業は内地人の手に握り大に富殖の道を講ずると共に國防上には南門の鎖鑰として其守備を嚴にするの必要さへあるに畢竟心の底より歸服せざるのみか動もすれば反抗を逞ふせんとする彼の島民等を其儘に差置きながら如何にして目的を達す可きや明白の次第なりと云ふ可し左れば彼等に對するには飽までも威嚴の手段に出でて形勢の險惡たるものを嚴重に處分するは勿論内地同樣の法律を敢て苟も之に從ふ能はざる輩は一歩も假すことなく颯々と境外に放逐す可し馬關條約に割讓地の人民は二個年間を猶豫して去就を決せしむるの明文あれども其猶豫は彼等が我政令に服したる上のことにして苟も不從順の輩は即刻放逐して差支なきものなり殊に臺灣内地の人々は續々彼地に入込みて商賣事業に着手するもの少なからず現に彼の内地に鐵道敷設の計畫さへある今日なれば頑民の反覆常なくして生命の危險さへ圖る可らずとあれば自から好んで其危險を冒すものはある可らず拓殖上に容易ならざる障害にこそあれば今回の騷動の如き寧ろ好機會として文人流の姑息手段は一切止めにし飽までも剿討して彼の醜類を殲し一般の頑民と雖も苟も不從順と認めたる輩は容捨なく放逐して全嶋の醜氛を一掃するの決斷あらんこと我輩の敢て希望する所なり

○將校の戰死者

一昨日桂臺灣總督の名を以て大山陸軍大臣に宛て土匪蜂起以來戰死したる將校の姓名を報告したり即ち左の如し

歩兵大尉　山田萬四郎　　歩兵中尉　中村道明
歩兵中尉　松尾幸一　　歩兵少尉　仁科眞佐四郎
歩兵大尉　宮永計太（負傷後死亡）

○討伐隊の運動

臺灣土匪討伐隊の運動に關し立見少將より桂總督に達したる電報を同總督より更に陸軍大臣に報告したるもの左の如し

臺北立見少將より七月八日午前十一時發電報

雲林より退却せし佐藤少佐は大甫林に止り本月二日より五日に亘り附近の土匪剿討に從事せり旅團は豫定の如く一昨六日南投附近の討伐を終り諸隊を臺中に集合せり而して昨七日更に今橋中佐に歩兵二大隊、砲兵一中隊、工兵若干を附し彰化方面より前進、南部の連絡を恢復し續て雲林附近の掃討を命じ尙ほ埔里社に一中隊を增加し且つ該地の連絡を維持する爲め松居少佐に二中隊を附し萬斗附近に派遣せり

右及報告候也

七月九日　　桂臺灣總督

大山陸軍大臣宛

○土匪掃討の詳報

臺灣雲林附近其他に起りたる土匪の詳報左の如し

●●●●●●●●土匪の偵察、中村中尉の自殺　雲林を距る東南方約四里に當れる大平頂附近に箇義及び柯鐵なるもの土匪を嘯集し勢猖獗なりとの報ありしかば雲林守備隊の小隊長陸軍歩兵中尉道明氏は下士以下二十名を率ゐ其他雲林支廳員三名及び憲兵二名を同行して去る六月十四日午前二時雲林を發したり時に天未だ明けず風物慘憺行路甚だ艱む至る處の村落閭門固く鎖して亂抗鹿柴を植へ門傍看守を付して日夜警戒す其狀恰も敵に對するが如し以て此地方賊勢跳梁の跡を知るべし午前五時半大平頂山を距る約三清里の處に出で草原に踞して少憩す此より山麓を左折し迂回して其背後に出れば一帶の沙埃細流砂礫を雜ふて左吾右支し左岸一山あり崖脚崩壞して絕壁をなす二三十歩にして大平頂の入口に達す此山高からずと雖も樹木鬱蒼並備ほ暗く二三の土人を嚮導とし將さに山に入らんとするとき忽ち後方に當り一發の銃聲を聞く顧れば硝烟は彼の崩壞せる崖脚より起る是れ賊哨の信號するものなり中村中尉は令を一隊に傳へ相警戒して行く賊又二三發を連射し我前面に進擊するの狀あり我之に應戰し且つ擊ち且進みて山上に達すれば賊は山上險要の位置を扼して壘壁を築き哨兵小屋を設けて防禦の準備をなし居たるもの〻如し然れども我兵の此處に至る早や蹤影を止めず是に於て哨舍に火し前方に進擊す途々一丸あり叢間より飛び來りて一土人を斃す其餘の土人恐惶狼狽嚮導を辭するを勵聲叱咤して漸次に地步を進め適當の配兵をなして斥候を放ち賊の動靜を探らしむ然るに前面の深林を隔て〻約百メートルの山上に人語あり日本兵に歸服せよと云ひ或は其背面に出でよと云ふ蓋し彼等の愚鈍なる我兵を以て此語を解せずとなし福州語を以て其同類に號令するものなり既にして斥候歸り報じて曰く土匪三人前林の樹梢に攀ぢ我情勢を窺ふもの〻如し而して徑路僅に前溪を通ずるのみと一條他に進む能はずと霎時にして大木を倒伐し大石を顚墜して我兵の進退を扼し且つ之を壓殺せんとは愚亦甚し斯くて前面攻擊の不利なるを知り賊の背面を襲はんとするも榛莽通ずべからず我兵頗る逡巡恰も好し此時放火せる山上の哨舍は一時に燃へ揚りて炎焰天に漲り爆聲一轟乃ち其機を窺ひ側面より大に射擊す賊亦之に應戰し頑固に抵抗して飛丸雨の如し對抗少時其効なきを以て附近の山林に放火し一先づ此地を引揚ぐ時に午前十時荊棘茅茨の間を潛りて行くこと半丁道忽ち窮し深谷の上に出づ俯瞰すれば斷崖十丈人をして思はず慄然たらしむ然るに此深谷は大坪頂と其前山とを區劃せる自然の溝渠にして此崖上に沿ひ左曲山麓を迂回すれば無事に村落に出づるを得ると雖も之を行かんには多くの時間を費し或は賊の逆襲を受くるの虞あり意を決して藤蔓を攀ぢ強て深谷に直下すれば絕壁崩れて人皆顚轉して手足悉く傷痍し流血淋漓たり此虛に乘じ賊は追尾來襲し俯瞰我一隊を狙擊す我兵亦應戰したるも地利彼に在り我兵死者三名傷者亦少なからず小隊長中村中尉及び吉村軍曹等亦傷く是に於て川上軍曹は雲林支廳員佐々木某と謀り本隊に現狀を報ぜんと欲し一行六人山脚を潛行す時に賊溪口に在り頻りに狙擊せるも樹林の爲めに遮られて幸に命中を免れたり一行の漸く逃れて山腹に出づるや中村中尉の從卒某が外一名の兵士と潛行し來るに會す傳へて曰く中尉傷を蒙り終に自刃すと●●●●●●一行相目して語なし既にして一行は兩組に分れ一隊は川上軍曹之を率ゐ一行は佐々木某之が長となりて先行し漸く一徑を索め進むこと數町賊は頻りに一齊射擊して我情勢を窺ふ須臾にして前丘二人の賊あり白衣銃を攜へ我前路を扼す一行亦踵を旋らし別路を取り山を下りて庵坑庄に着す時に午後三時此日夕六時雲林に歸着す

●●●●●●太平頂土匪の掃蕩　中村中尉の戰利あらざるを知るや中隊長古市大尉は一小隊を率ゐて應援に向ひたるも攻擊に不利なるを察し雲林に歸りたるが嘉義守備隊長益田中佐は此報に接すると共に直に歩兵一中隊と一小隊及び大甫林の一小隊を佐藤少佐に屬せしめて雲林に派遣し更に旅團は北斗の守備兵二小隊を雲林に增遣したり右各部隊は十五日同地に到着せるも太平頂の地たる攻擊上最も困難なる地にして約五百の土匪防禦工事を施して之に據りたるを以て更に第二旅團長より臺灣に在る第四聯隊第一大隊の二中隊及び砲二門を松井少佐に屬して派遣し混成技隊を作りて益田中佐其指揮を司り猶ほ一方に於ては剌桐港、雲林間に電線架設を計畫し十八日に及んで佐藤大隊は大平頂を偵察したるに匪徒は既に該地を去り良民を裝ひつ〻附近の村落に逃避散在するを見たるを以て翌十九日拂曉同大隊は地區を分ちて附近の村落を搜索し土匪三十五名を捕へ斬殺若くは銃殺し且つ彼等の潛伏したる村落は悉皆之を燒夷

したり此日中村中
ずるを得たり夫れ
落を掃蕩して更に
地方土匪の掃攘を
守備地に歸りたん
●●●●●簽箕湖頂大山の
土匪出沒して且其
姦し其暴戾到らざ
を訴ふる再三賊我
討を第一旅團に命
大隊を率ゐ曾根
らしむ佐本大隊く
方より頂双溪に向
宮日下部中尉是
月十八日炎暍赫々
路を攀ぢ險隘を
し先づ賊狀を詳に
る巡查の賊狀を
總稱して頂文山の
要害を備へ人馬
の二箇所あり嶮
巣窟を構へ毎に
へて質となし金
故に此地方の良
なしと此夜此地
を作ひ來り又賊
漸く確かなり翌
此間の行程四里
崛曲折丘陵に登
攀登するが如く
漸く平林尾に達
平林尾は四十餘
瀬庄より右は石
に會し新店街方
第三大隊なる一
り此夜來りて賊
二十日朝六時本
るを以て二小隊
左に取り厚德園
川少尉の率ゐる
て左右賊巣を包
戶田警部巡查十
つて本道を進め
本隊の九層源坑
するに皆老幼婦
女又實を吐かず
を見るに彼等は
漁猟し市に鬻ぎ
物の料とするが
在するのみ而し
の擧をなし落脩
ずんば山谷野賊
九層源坑の北十
中腹に懸れり此
是即ち賊の根據
に在り蓋し本道
して此家即ち彼